

バンコクの暑い夜

祐ちゃんはもう死んだろうか

東南アジアは程度というものを知らない。ホテルの冷房は極端に利きすぎる。凍えそうに寒くなるが止めれば暑い。もう何度もつけたりとめたりしてそのたびに目を覚ます。

兄から電話があったのは、バンコクへ旅立つ3日前だった。音信不通だった叔母が危篤状態で大久保病院に入院していると知らせてくれた。すでにほとんど意識はないし、お前が行っても助かるというものでもない。必要なことはすべて自分がやるから、見舞いの必要はない。出発前の忙しい時につまらん知らせで煩わせてすまないと謝った。別に冷たい男というわけではない。弟を親戚づきあいやその他のくだらない雑事で煩わせたくないと思っているのだ。こういうときは、いつも兄の方で適当に片付けてあとから経過を知らせてくる。年齢は1歳しか違わないが私に対してはいつも保護者である。

叔母は母の妹で母とは年が大きく離れている。母は地味な顔立ちでそばかすがあり、お世辞にも美人とはいえなかったが、叔母は華やかな顔立ちをしていた。母にしてみれば、年齢の離れた若い独身の妹を、叔母さんとは呼ばせなくなかったのだろう、私たちは彼女を祐ちゃんと呼んでいた。叔母と母は母親が違う。母の母、つまり私の祖母は母を産むとすぐ亡くなった。新しい母親も、何人かの子どもを産んだが、叔母以外はすべて男で、叔母は母の唯一の姉妹になる。生まれた子どものうち何人かが死に三人生き残った。やがてその母親も死に父親も死んだ。母は幼い兄弟の面倒をみることになった。親類縁者の支えも有ったのだろう。母のすぐ下の弟にあたる叔父は父親と同じ大学を卒業した。戦中戦後の混乱の中で、叔母とその下の弟はそうはいかなかった。母は自分と同じように母親に死なれた女の子を抱えた町工場の経営者の後妻となり、一番下の弟はその町工場で働くことになった。叔母は商社の事務員のようなことをしていたが、やがて、町工場の事務を手伝うようになった。母は続けて3人の子どもを産んだ。2番目の姉、兄、私である。母の家系は体質的に病弱である。母も私を産むと大病をして長く入院した。叔母は明るい性格だった。不美人で病弱で生真面目で髪ふり乱して生きる母と、天真爛漫、若く華やいだ叔母とは対照的な姉妹であった。叔母は生涯独身であった。叔母の世代には、結婚相手となる男性の数が少なかったし、何回かした見合いも自分から断ってしまった。叔母は私たちに家族的なつながりを感じていた。叔母は私たち家族によりそうように暮らした。

祐ちゃんはもう死んだろうか

1時間ぐらいうると、兄嫁から電話があった。「煩わせることになるから知らせる必要は

ないと言われたが、お前は可愛がってもらったそうだから、後から知らせてほしかったといわれても困るので、」と前置きをして、今晚が危ないと兄嫁が電話で告げた。しばらく考えたが、まだ夜の9時であった。翌日早朝の出発には何とか間に合わせることにして病院へ向かった。

私が大学4年生の夏に母は死んだ。すでに二人の姉は嫁いでいた。母の葬式の1週間あと、「母がいなくなった今、家庭は存在しない。俺もそうするから好きなように生きろ。」と兄と私に向かって父は奇妙な宣言をした。私はこの言葉にしたがって、専ら大学の実験所で暮らし気が向いた時だけ家に帰った。父の日常生活は母の生前とあまり変わらなかった。夕方、早めに仕事をおえるとさっさと飯を食い、碁会所に通い賭け碁を打って夜帰ってきた。ただ、母の遺骨は部屋に置き、一周忌をすぎても納骨には行かなかった。兄も別の意味で変わらなかった。進んで、炊事・洗濯・掃除を行い、まるで母がいたときと同じように家庭を維持しようとした。叔母はすでに中年になっていて、何かと私たちの世話を焼こうとした。姉の変わりとなる。それが叔母の思っていたかもしれない。実際には私はすでに大学の4年生となっていて彼女を必要としなかった。父は変わり者である。町工場の経営者なのに大もうけをたくらんだりしない。とくとくと独自の哲学を語るということもなく、あまり目立とうとせず飄々と人生を楽しんでいるように見える。読みが深くて隙がなく、柔軟で持続力があり、適応性に富んだしたたかな男でありながら野心がない。それは母の生前も死後も変わらなかった。60歳を超えて二人目の妻にも先立たれたが、それくらいでは自分を失い毫碌するようなこともない。亡くなった妻の妹が子どもの母親代わりとして家族の中に入ってくることを、ましてそれが自分の経営する会社の従業員であることが、外から見ればどのように見えるかを冷静に考えることができた。父は叔母を遠ざけた。

祐ちゃんはまだ死んだらうか

病院には兄と二人の姉がすでにいた。病室には、黄色くしなびて木屑のような見知らぬ老婆が何本かのチューブにつながれて横たわっていた。わずかに開いた目の中に、黄ばんだ白目が見えた。姉は「祐子お姉さん」と呼びかけたが、その呼びかけは老婆に似つかわしくなかった。私は黙って部屋を出た。待合室には叔母の友人という人と私のいどこにあたる人がいて。〇〇子ですと挨拶をした。その人の父親つまり母のすぐ下の弟もすでに死んでいた。叔母の弟にあたる叔父にはまだ連絡が取れないとのことだった。姉たちとはしばらく会っていなかった。姉たちは私の近況などいろいろ訪ねた。私は下の姉が母に似てきたと思った。

私は母が死んで数年後に自分の家庭を持った。兄は30半ばまで独身でいたがやはり家庭

を持ち、父は工場を兄に任せて田舎へ引っ込んで再婚した。叔母もしばらくは事務員として働いていたがやはりいにくくなったのだろう。転職した。姉たちとはしばらく連絡があったようだが、それも途絶えた。彼女の弟にあたる叔父も工員を辞めて、母の兄弟たちとは音信が途絶えた。

祐ちゃんはもう死んだらうか。

兄に病院から連絡があったのは、叔母を病院に担ぎ込んだ近所の人たちが、叔母の荷物の中に町工場の住所を見つけたからである。叔母が住んでいた小さなアパートは中井駅の近くにあった。私はこの駅から大学に通った。叔母は、町工場からそう遠くないところで、あの町工場を見ながら一人で暮らしていたのである。そして、4半世紀以上の時間が経過した。

経緯の説明が終わると兄は言った。「点滴の瓶が有っただろう。点滴の減る速度がだんだん遅くなっていく。死に向かってだんだん代謝が遅くなっているのだ。やがて死ぬ。待合室に知らせが来る。そして叔母の死をみんなで確認する。それだけのことだよ。お前は明日の朝早出かけなければならない。すでに12時を過ぎた。そろそろ終電だ。死ぬのは明日の朝以降だろう。お前も帰った方がいい。自分も帰る。後のことはやっておく。」

いところを残して全員帰ることにした。病院を出たとたん突然の豪雨となり、西武新宿の駅までのわずかな距離の間にずぶぬれになった。叔母の友人という人が、みんな帰ったので、病人が怒ったと言った。みな苦笑した。私と上の姉だけが急行に乗った。車内はすいていたが2人並んで座った。私が最近引っ越してきた家についてあれこれ聞いた。私は姉にたまらない懐かしさを感じた。

祐ちゃんはもう死んだらうか。

(20040424)